

スがされ、劇的な変化が主人公に訪れるのに感動しました。ちょうど物性研究所に来る前に、学生と一緒にやった研究成果がジャーナルにアクセプトされ、世の中にインパクトがあるので、プレスリリースできると考え大学の広報に原稿を送ったのですが、オンラインでアクセプトされてからすぐに速報版が出版されてしまい、広報はプレスリリースできないと杓子定規に言ってきたのです。その時は、まあ、仕方ないと諦めかけていたのですが、柏ゲストハウスのTVのドラマを見てから考え方を180度変えました。その後、プレスリリースの意義を訴え、本当の紙での出版がまだされておらずそれが2ヵ月後の2016年10月であることを訴えて、広報が意義を認めて頂き最終的にプレスリリースすることができました。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2016/160930_1.html

そして、物性研究所離任直後の10/1にNHK等にTVにて放送され(無論、TVを持っていないので自分では見れませんでした。)、その後幾つかの企業、国の研究機関から共同研究のオファーがあり忙しい日々を送る毎日に激変しました。文字通り人生が変わりました。又、2016年10月に一番アクセスが多い京都大学の研究成果発表として取り上げられたことも後で知りました。

この研究成果は、本来、物性研究所のテーマと一見関係ない様なテーマですが、多地点で取得する人工衛星の電離圏データの相関を考えるというのが、地震予測につながりうる異常検出法となるというものであり、相関こそがデータ解析手法と物理(MC)とがつながる鍵という訳です。そして、この研究が世にでたきっかけは、物性研究所のゲストハウスのTVにある訳であり、何かの間違いでこの研究が賞をもらうことになれば、間違いなく、物性研究所(及びそのゲストハウスのTV)のお陰と考えています。

(5) 研究室で議論のために連れてきた学生(博士課程)の笑顔(2016年8月) :

(1)で上述し、(2)-(3)で例示された様に、物性研究所でできる限り長く滞在することは、やはり実りが大きいことが考えました。ただ、4月から8月の最初までは講義、院試があり物性研に長く滞在できません。そこで、6月くらいに、自分は夏の院試が終わった8月のお盆前からの1-2ヶ月、時間の有る限り、物性研究所に長期滞在することを、研究室の学生に宣言しました。その時、一番困った顔をした学生(右記写真参照)を物性研究所に連れてきました。その学生(大久保健一君(当時 D2))はたまたま実家が東京

にあり、毎日の様に物性研にて研究の議論をしたのですが、本人が満足していたのは、写真の笑顔が証明しています。同室の渡辺宙志さん、大久保毅さん、セミナールームを毎日貸していただいた加藤岳生所員に、研究から、研究者としての生き方などアドバイスしていただき、指導教員として大変ありがたかった次第です。



最後に :

今回の2016年前期の物性研での客員滞在一番誇りを持って言えるのは、前期を通した滞在期間の長さだと思います。特に2016年の8月の滞在は、自分の研究者人生にとっても忘れられないことの連続でした。ただ、これらの経験だけで満足してしまうのでは滞在時間だけ長かった客員所員(記録的な一過性の台風男?)として記録されるだけで、意味がありません。今後、この普段と異なる素晴らしい環境で議論し、考えたことを基礎に、今後の物理やモンテカルロ計算のブレークスルーとなる様な研究を継続的に進め、物性研との共同研究の成果として、発表につなげていきたいと思います。最後に、この様な機会を与えていただきました物性研の皆様をはじめとしまして、何から何まで私の客員としての滞在を支えていただきました川島直輝先生と秘書の光富さんに、改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。